

# 未来への 挑戦

全国の教育委員会では、地域の課題をしっかりと捉え、様々な取り組みを行っている。その1つが、今の子どもたちが社会に出る頃に、最も必要な力の1つと考えられているICT 機器を使った情報活用能力、および英語によるコミュニケーション能力の育成だ。今回は、タブレット端末を活用して学校間連携を行っている新潟県南魚沼市と、次期学習指導要領を見据えて、小中一貫の英語カリキュラムを進めている岐阜県岐阜市の、2つの事例について、教育委員会と学校の取り組みを紹介する。

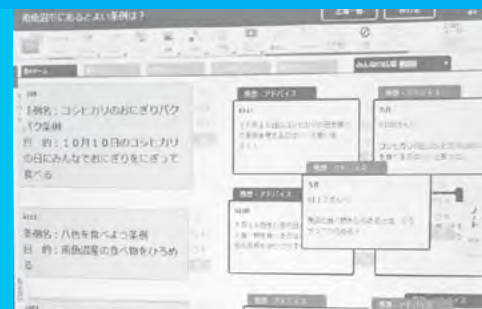
## 事例 1

新潟県  
南魚沼市

ICT

▶▶▶ 14 ページ

タブレット端末を  
活用した  
新たな授業スタイルに挑戦



## 事例 2

岐阜県  
岐阜市

英語

▶▶▶ 20 ページ

次期学習指導要領を見据え  
「5年先に行く」  
小中一貫の英語教育に挑戦



# 学校間交流授業など タブレット端末の様々な活用で、 教育施策の相乗効果を目指す

新潟県南魚沼市の教育の根底にある思いは、「共生社会」の実現だ。そのため、従来から力を入れてきた「国際理解教育」「特別支援教育」に加えて、タブレット端末の導入を軸とした「教育の情報化」の3つを柱に据え、さらに、2016年度から実施する「南魚沼市後期教育基本計画」の策定を通して、互いに支え合い、共に成長していく教育の具現化を目指している。

- ◎ 2004年に六日町と大和町が合併して誕生。翌年には塩沢町を編入した。新潟県南部の魚沼盆地に位置し、魚野川や越後三山など豊かな自然に恵まれる。特産品として南魚沼産コシヒカリなどが有名。
- ◎ 人口…約5.9万人 ◎ 面積…584.55km<sup>2</sup>
- ◎ 市立校数…小学校19校、中学校6校、総合支援学校1校 ◎ 児童生徒数…4,663人
- ◎ 電話…025-777-3118（学校教育課）
- ◎ URL…<http://www.city.minamiuonuma.niigata.jp/kosodate/kyouiku/>

## 新潟県南魚沼市 プロフィール

## 教育長の 戦略

# 国際理解・特別支援・教育の情報化の 3本柱で「共生社会」の実現を目指す

南魚沼市教育委員会 教育長 南雲権治

## 「共生」を軸に国際理解教育と 特別支援教育に力を入れる

南魚沼市では、2011年度に10年間を見通した「南魚沼市教育基本計画」を策定しました。笑顔があふれる子どもを育て、それを市民全体に広げる教育を目指して、「笑顔あふれる教育プラン」と命名しました。

本市の教育の根底には、「共生社会の実現」という思いがあります。年齢や国籍、障がいの有無にかかわらず、誰もが理解し合い、支え合って共に生きる。こうした共生社会の実現こそが、教育の使命だと考えます。

この実現に向けて、「国際理解教育」「特別支援教育」、そして「教育の情報化」の3つを柱としました。

国際理解教育については、教育特

区の認可を受け、2008年度に小学校5校で「国際科」の授業を始めました（2009年度から全小学校）。本市には、世界40か国以上の留学生が学ぶ大学院大学の国際大学があります。当初は、同大学を活用して英語力育成に特化した教育を行う案もありました。しかし、共生社会の実現という方針を踏まえると、英語力だけでなく、多様な文化や価値観を学び、他者への思いやりをもった表現者を育てたいとの思いから、国際理解教育と英語教育の2つを軸にしました。

特別支援教育も、共生社会の実現のために力を入れています。その中心は、2013年に開校した南魚沼市立総合支援学校です。校名には「障がいは特別ではない」というメッセージと、教育委員会や福祉保健部、産

業振興部などが連携して、「就労支援や家庭支援、コミュニケーション支援などを総合的に行う」という意味を込めました。また、地域との交流や社会資源の活用、通学の便などを考慮して市の中心部に設置しました。国際大学などと共同で学校PRビデオを作成したり、市立図書館の中でカフェを運営したりと、立地を生かした教育を行っています。

さらに、同校の中に特別支援教育推進室を設置し、課題に素早く対応すると共に、特別支援教育の指導主事が園や学校を訪れ、保護者と適切な支援や進路について丁寧に話し合える仕組みを作りました。これにより、障がいと向き合い進路を選択する力がつくなど、保護者の意識が前向きになってきていると感じています。

\*プロフィールは2016年3月時点のものです。



なぐも・けんじ 東北工業大学工学部卒業後、建設会社等の勤務を経て、1979年から南魚沼郡大和町役場に勤務。2004年の合併により南魚沼市職員となる。2007年に教育委員会に出向し、学校教育課長、教育部長を経て、2012年から現職。

## タブレット端末を活用した学校間交流授業の可能性

教育の情報化については、2014年10月、全小・中学校にタブレット端末を導入しました。その活用において大きな可能性を感じているのが、学校間交流授業です。市内に多い小規模校では、子どもが多様な人と話す経験が乏しいため、表現力の弱さにつながっているという課題意識がありました。そこで、2015年11月から市内の小規模校同士で、「ミライシード」\*1の「ムーブノート」\*2の機能を活用した共通の授業を行っています。今後、大規模校と小規模校、中学校と小学校など、多様な学校間交流授業を行い、教育の幅を広げていこうと考えています。

現在は、3つの柱をそれぞれ別々に進めるのではなく、国際理解教育や特別支援教育も、情報化の推進により充実を図ろうとしています。例えば、総合支援学校や各校の特別支

援学級でもタブレット端末を活用し、子どもの表現の幅を広げたり、理解を深めたりして、教育のユニバーサルデザイン化を図っています。

## スペシャルオリンピックスに「共生社会」の実現を予感

「南魚沼市教育基本計画」の策定から5年が経過したことから、施策の成果や課題を踏まえて、2016年度から5か年の「南魚沼市後期教育基本計画」を策定しました(図1)。

本市ではここ数年、人間関係のトラブルによる悩みや不登校などの課題が浮き彫りになっています。また、教員の多忙化も大きな課題です。

そこで、2011年設置の「南魚沼市子ども・若者育成支援センター」で、相談窓口を充実させて初期対応を強化したり、不登校対策会議を実施したりして、全ての子どもが生き生きと学べる環境づくりに努めます。ま

た、学校への負荷が大きい現状を改めるため、「多忙化解消会議」を実施し、教員の負担軽減を図ります。

さらに、地域全体で子どもを育てるため、地域・家庭の教育力向上を目指して、「市民総がかりの教育」を充実させ、市内の12地域がそれぞれ主体的に地域づくりに取り組むための予算配分や支援を行います。こうした施策を通して、市民全体で共生社会の実現を目指していきます。

2016年2月にスポーツを通して知的障がい者の社会参加を応援する「スペシャルオリンピックス」\*3を本市と新潟市で開催しました。そこで、地域の住民や子どもたちが応援やボランティアとして多数参加し、選手と触れ合い、生き生きと活動する姿にとっても感動しました。これこそが共生社会であり、そのような場をもっと増やしていくことが、私たち教育に携わる者の使命だと感じています。

図1 「南魚沼市後期教育基本計画 6つの基本方針と施策の方向性」

基本方針	施策の方向性(抜粋)
①安全・安心で、活気に満ちた学校づくり	<ul style="list-style-type: none"> <li>●「挨拶運動キャンペーン」を市内全学校の統一運動として実施</li> <li>●いじめや非行根絶のための毅然とした生徒指導の徹底</li> <li>●不登校を減少させるための初期対応の充実</li> </ul>
②意欲を高め、確かな学力を育成する教育の推進	<ul style="list-style-type: none"> <li>●児童生徒が自ら学ぶ態度を育てる授業づくり</li> <li>●学習意欲と学習習慣を育てる小中連携の充実</li> <li>●児童生徒一人ひとりの実態に応じた少人数指導及び個別指導の充実</li> <li>●2014年オープンの市立図書館の活用及び学校図書館連携司書との連携強化による学校図書館の充実</li> <li>●「地域教材データバンク」など地域の特性を生かした教材づくり</li> </ul>
③健やかな身体を育成する教育の推進	<ul style="list-style-type: none"> <li>●最後までやり遂げる子どもの育成</li> <li>●幼児段階から走、跳、投のバランスのとれた運動を意図的・計画的に取り入れる</li> </ul>
④夢、未来、希望を育む教育の推進	<ul style="list-style-type: none"> <li>●アメリカ・オレゴン州への中学生海外派遣事業</li> <li>●ALTの活用と国際大学との連携によるビレッジ事業</li> <li>●学習指導要領改訂を見据えた「国際科」のあり方の再検討</li> <li>●タブレット端末の有効活用のため、大型テレビ等の周辺機器の全学校への導入</li> <li>●小・中学校の職場見学・職場体験などの充実のための支援</li> </ul>
⑤共生社会の礎を築く特別支援教育の推進	<ul style="list-style-type: none"> <li>●一人ひとりの教育的ニーズに応える指導の充実</li> <li>●幼児期から義務教育修了までの一貫した支援体制の構築</li> <li>●総合支援学校のセンター的機能の拡充</li> </ul>
⑥生きる力の基礎を培う幼児教育の充実	<ul style="list-style-type: none"> <li>●5領域における、生きる力となる心情、意欲、態度などの育成</li> <li>●幼児期にとって望ましい教育内容、教育方法、教育環境の充実</li> <li>●小学校との円滑な接続及び中学校区を単位とする連絡会の設置</li> </ul>

\*南魚沼市教育委員会提供資料を基に編集部で作成

\*1 「ムーブノート」「話し合いトレーニング」「ドリルパーク」の3つのアプリケーションで構成された、ベネッセのタブレット学習のプラットフォーム。

\*2 ミライシードの機能の一つ。各自がタブレット端末に書き込んだものをリアルタイムで共有できたり、学級全員の意見を一覧にして、分類やキーワード抽出により学習状況や理解度が容易に把握できたりする。

\*3 正式名称は「2016年第6回スペシャルオリンピックス日本冬季ナショナルゲーム・新潟」。





## 教育委員会の 施策

# タブレット活用の成果を生かして より幅広い教育への展開をねらう

## 南魚沼市教育委員会

### 教員の活用支援体制を整え タブレット導入を予算化

南魚沼市の教育施策における柱の1つ「教育の情報化」で軸となる事業は、小・中学校へのタブレット端末の導入だ。各校のパソコンの入れ替え時期となった2014年、タブレット端末を導入する案が浮上した。教育のICT化推進の背景には地域の課題が大きくあると、学校教育課の長澤俊英管理指導主事は説明する。

「本市は山間部にあり、大都市からも離れているため、入手できる情報が限定されやすい環境です。そこで、タブレット端末を活用することにより、情報収集、画像や動画を加工した資料の作成、さらには様々な人との意見交換による考えの深化などを行うことで、これからの時代に求められる力を育みたいと考えました」

ところが、多額の経費をかけて整備したコンピュータ室が十分に活用されていないこともあり、タブレット端末を導入しても本当に使いこな

せるのかと懸念の声が上がったため、2014年度予算での導入は見送られた。そこで、校長会・教頭会などの代表者から成る「学校情報化推進委員会」で、タブレット端末の活用方法を検討すると共に、ICT支援員を配置して先生方の活用を支援する体制を整えることにした。大嶋雅子学校庶務主幹は次のように振り返る。

「市教委が、副市長や市の財政部、情報管理室に、これからの教育におけるタブレット端末の重要性や、ICT支援員の有効性などを説明しました。その結果、2014年10月の補正予算で導入が正式に決定しました」

児童生徒用タブレット端末は、小学校が40台を上限に学校規模に応じた台数、中学校が各10台とした。2014年度は、「タブレットで何ができるか」や導入ソフトについての知

識を広め、操作方法を理解した上で実際に触れてもらうことで、教員の不安解消に努めた。そして、2015年度から本格的な活用を始めた。

### 学校ICT推進会議を通して タブレット端末の活用が活発化

2015年度は、市内小・中学校・総合支援学校の約半数にあたる13校（小学校10校、中学校3校）を研究指定校とし、残りの13校を2016年度の指定校として、全学校を対象にした。指定校では、タブレット端末を使った公開授業などを行っている。

タブレット端末の活用促進を担うのが、2014年に発足した「学校ICT推進会議」だ。全小・中学校と総合支援学校から選出された各1名の教員（情報担当者）とICT支援員で構成され、学校情報化推進委員会

図2 「タブレット端末活用実践集」での紹介事例（抜粋）

2 実践の概要

(1) 単元名「学級討論会をしよう」(光村図書)

(2) 学習の流れ

- 1 一人一人が、立場ごとに考えられる理由を挙げる。
- 2 討論会の進め方を確かめ、準備をする。
- 3 学級討論会をする。
- 4 討論会を振り返る。

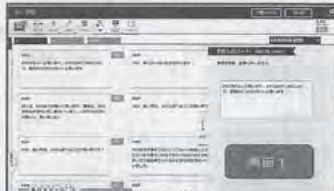

(3) タブレットパソコン「ミライシード」の活用方法

討論会のテーマを

- ① スポーツをするなら団体競技よりも個人競技がよい。
- ② ベッドを飼うなら、ねこよりも犬がよい。
- ③ 夏休みに遊びに行くなら、海よりも川がよい。

に設定し、それぞれの立場について自分の考えを「ミライシード」を使って書きこんだ。肯定側と否定側の両方の立場の主張に触れることで多面的に考え、より広い視野をもって、まともに向かうことができるであろうと考えた。そこで、肯定側と否定側の両方の立場に立って自分なりに考えられる理由を挙げ、学級全体で交流をすることにした。

シートを3つに分け、①に

1校あたり1～7個の事例を掲載。図や写真を豊富に取り入れ、細部まで具体的に紹介されている。

\*南魚沼市教育委員会提供資料をそのまま掲載



学校教育課  
管理指導主事

**長澤俊英**

ながさわ・としひで

十日町市立松代中学校校長などを経て、2013年から現職。



学校教育課  
学校庶務主幹

**大嶋雅子**

おおしま・まさこ

学校給食センターのセンター長などを経て、2015年から現職。

\*プロフィールは2016年3月時点のものです。

図3 小学校の国際科の授業時数

学年	年間授業時数	
	英語教育	国際理解教育
1・2年生	5時間	5時間
3・4年生	20時間	5時間
5・6年生	30時間	5時間

1・2年生は生活科の一部を、3・4年生は「総合的な学習の時間」の一部を充てている。

\*南魚沼市教育委員会提供資料を基に編集部で作成



写真1 夏休みに行う「インターナショナル・ビレッジ」には、市内の小学5・6年生約70人が参加。国際大学の留学生やALTと一緒に、英語でのゲームやインタビュー、プレゼンテーション活動をしたり、バーベキューをしたりと、楽しい1日を過ごした。このほか、中学生対象の「イングリッシュ・ビレッジ」も実施している。

の決定事項を各校に周知したり、各校の活用状況を報告して、実践例の共有を図ったりしている。

すると、夏休みを機に、各校の教員から「タブレット端末をもっと使えるようになりたい」という声が多く寄せられるようになった。それに対応して、説明会を数多く実施したところ、それまであまり使っていなかった学校でも、2学期には使用頻度が一気に高まったという。

「学校ICT推進会議で、各校の活用状況を報告し合うことで、学校間に競争意識が芽生えてきました。今では、市全体でタブレット端末を活用しようとする良い流れができつつあります」(長澤管理指導主事)

さらに、年度末には、成果として、各研究指定校の実践事例をまとめた「タブレット端末活用実践集」(図2)を作成した。実践集は市の関係部署にも提出して、タブレット端末の有用性をアピールし、次年度以降の予算獲得にもつなげる考えだ。

タブレット端末の活用が急速に広がっている背景には、子どもの積極的な学習姿勢もある。

「子どもに基本操作を教えると、『こんなことをしたい』『こんなこともできそうだ』といったアイデアがどんどん出てきます。教員は、ICT支援員のサポートを受けながら、子どもたちの思いを形にすることで活用法を広げています」(長澤管理指導主事)

タブレット端末を使った小規模校の小学校同士で実施した学校間交流

授業は、地元新聞にも取り上げられて大きな話題となるなど、さらなる実践の広がりが期待されている。

現在の課題は、無線LAN環境が普通教室に限定され、体育館や特別教室で有効にタブレット端末を活用できないことだ。今後は、教育活動の幅をさらに広げるため、インフラ整備に取り組みたいとしている。

### 国際理解教育を通して 人とかかわる意欲を高める

同市の2つめの柱である国際理解教育は、小学校の「国際科」の授業で行われている(図3)。英語教育の授業は全て、担任とALTのチーム・ティーチングで行う。市が直接雇用する7人のALTが協働で指導案を作成し、授業に活用することで、教員の負担軽減を図っている。

国際科の目的は、コミュニケーションに対する関心・意欲を育み、より良い人間関係を築こうとする意識を高めることだ。そこで、国際理解教育の時間には、国際大学の留学生や、市の「国際科人材バンク」に登録した外国人や海外経験のある日本人を小学校に招いて、交流活動を通して各国の伝統・文化・習慣などを学ぶ活動を行う。英語力はこれらの活動の結果として身につくものと捉えているため、数値的な評価は行わず、「積極的に人とかかわろうとした」などのねらいに、どの程度迫ることができたかを評価している。

こうした活動を通して、子どもた

ちには、英語や外国文化、さらにはコミュニケーションに対する意欲や関心の高まりが見られるという。

「小学校低学年の児童でも、外国人と違和感なく話しており、全体的なコミュニケーション能力は向上していると思います。また、アンケート調査の結果を見ると、『英語の授業は楽しい』と感じている児童が98%に上り、76%の児童が家庭で国際科について話をしていると回答しています。このことから、国際科の成果がうかがえます」(長澤管理指導主事)

### タブレット端末を より広範な教育活動に活用

今後は、教育の情報化を国際理解教育や特別支援教育と連携させ、取り組みの成果を高めていく予定だ。

例えば、夏休みを実施している国際大学の留学生やALTとの交流イベント(写真1)では、子どもと留学生と一緒に、タブレット端末を用いて情報収集や資料作成を行い、プレゼンテーションをする活動を通して学習を深めている。今後、国際科の授業でもタブレット端末を活用する方法を模索していく予定だ。また、特別支援教育で、言葉を発しづらい子どもがタブレット端末を用いて表現するなどの活用例も広がっている。

「『南魚沼市だからできること、やらなければならないこと』を見据え、タブレット端末を効果的な1つのツールと捉えて、教育を充実させていきます」(長澤管理指導主事)



## 学校現場の 実践

# 情報活用の学習や学校間交流などで タブレット端末の新たな活用を模索

## 南魚沼市立第二上田小学校



◎ 1906（明治 39）年創立。教育目標は「自ら学び豊かな心でやりぬく子」。環境保全活動に力を入れ、2010年「全国野鳥保護のつどい」で最高賞受賞、2015年「新潟県環境賞」受賞。

校長 村山稔先生

児童数 64人

学級数 7学級（うち特別支援学級1）

電話 025-782-0758

URL <http://www3.schoolweb.ne.jp/swas/index.php?id=1510018>

## ICT支援員に支えられ 広がるタブレット端末の活用

現在では、学年や教科を問わず、様々な授業でタブレット端末を活用している。そのために欠かせない存在となっているのが、ICT支援員だ。月2～3回来校し、授業の準備や教材の作成補助、授業中のICT機器の操作支援を行うほか、教員から質問や相談を受けたりしている。

「『こんな資料を作りたい』『こういう授業に対応するソフトはないか』といった相談をしたり、タブレット端末を使った授業の方法を提案してもらったりしています。おかげで、本校の教員への活用導入がスムーズに進みました」（村山校長）

授業では、社会科や「総合的な学習の時間」での調べ学習、またドリル学習に活用することが多い（図4）。2年生の生活科では、植物の生長の様子をタブレットで撮影して観察日記を作成するなど、情報を整理して活用する活動に用いている。5年生

## ドリル活用や昼休み開放で タブレット操作に慣れさせる

越後山脈の山々に囲まれる南魚沼市立第二上田小学校は、全校児童数64人の小規模校だ。自然豊かな環境で育ち、素直で純朴な子どもが多い半面、様々な人と触れ合う機会が少なく、人前での発表を苦手とするなど表現力がやや弱い傾向にある。そうした課題を踏まえて力を注いでいるのが、タブレット端末を活用した授業だ。村山稔校長はこう話す。

「情報化社会にあって、適切な情報を選び取り、整理し、まとめ、発信していく力は、どの地域に住んでも重要です。タブレット端末を活用した学習を通して、子どもにそうした力を高めたいと考えています」

児童用タブレット端末16台は、普段はメディアルームで保管し、授業で使用する際に各教室に持ち出す。使用する学級が重ならないように調整しているので、授業では児童1人1台で使用する場合がほとんどだ。

授業で活用するためにまず、子どもが操作に十分に慣れる必要があるとの考えから、最初は操作が簡単な、ミライシードの「ドリルパーク」\*で

漢字・計算の問題に取り組ませた。6学年担任の石川衣里先生は、子どもの様子を次のように語る。

「ドリルといってもゲーム感覚で取り組み、さらに友だちとスピードを競うのも楽しいため、みんな夢中になって取り組んでいます」

毎週火曜日の昼休みには、地域教育コーディネーターについてもらい、メディアルームを開放。子どもが情報を検索したり、学習ソフトで学んだり、タブレット端末に触れられるようにしている。この時間が好評で、参加を希望する児童が多数いたため、2016年度は月1回、土曜日にも開放することとした。

図4 各学年でのタブレット端末活用状況（抜粋）

学年	調べ学習	映像視聴	ドリル（ソフト）	記録・作品作りなど
1年	外国語活動「外国のくらし」	道徳「公園の使い方」	ひらがな、図形 英語自作ソフト	図工「絵画の配色」 生活科「野菜の観察日記」
2年	外国語活動「外国のくらし」	道徳「公園の使い方」	漢字・計算 英語自作ソフト	生活科「野菜の観察日記」 生活科「自分のおいたち」
3年	外国語活動「外国のくらし」	理科「磁石」 国語「俳句」	漢字・計算	総合「上田の宝探し」 国語「お気に入り本紹介」
4年	魚・水生生物 外国語活動「外国のくらし」	理科「星の動き」 算数「面積」など	漢字・計算	図工「粘土作品の構成」
5年	総合「和歌山県の歴史、文化」 「カレーの具材と量」	道徳「著作権」	漢字・計算 英語自作ソフト	総合「和歌山県岩代小学校 と食育交流」
6年	社会「外国の特徴」 理科「人と環境」など	道徳「情報モラル」 体育「鉄棒」など	漢字・計算	総合「まちづくりキッズプロ ジェクト」近隣校と情報交流

総合…「総合的な学習の時間」

\*第二上田小学校の提供資料を基に編集部で作成

\*ミライシードの機能の1つで、個別に学習を進めるための国語・算数（数学）・理科・社会・英語（中学校のみ）の教材。子どもが自分の理解度に合わせて内容を選び学習することができる。



の体育の授業では、跳び箱の様子を動画で撮影し、上手に跳べない子どもにもスロー再生を見せながら解説。苦手克服に役立てたという。

「ムーブノート」を活用して子ども同士の意見交換を促し、思考を広げたり深めたりする学習活動も取り入れている。例えば、5年生の道徳の授業では、「著作権」の理解を深めるため、「図工の時間に自分の描いた絵をまねされたらどう思うか」というテーマで発表した。ある児童がタブレットに意見を書くと、付せんのような形でほかの児童のタブレットにも表示され、リアルタイムで共有される。この授業を行った5学年担任の上野俊也先生は、次のように語る。

「手を挙げて発言するのが苦手な子どもでも、画面上で発表することには抵抗感が薄いようで、普段より意見が活発に出了。『自分の考えを認められたい』という思いもあるのでしょう。友だちの意見を知り、『そういう考えもあるのか』など、違う考えがあることに気づいたり、自分の意見を見直すきっかけにしたりする姿も見られました」

## 学校間交流授業を通して 新たな視点に気づく

2016年1月には、6年生がムーブノートを活用して、隣の第一上田小学校の6年生と学校間交流授業を行った。授業を担当した石川先生は、そのねらいを次のように説明する。

「本校の6年生は10人で、幼少期からずっと一緒に過ごしてきた仲間なので、意見交換を促しても、予想外の考えに触れるのが難しい状況です。他校の児童との交流を通して、新たな気づきを得たり、考えを広げたりしてほしいと思いました」

今回の交流授業は、同じ中学校区にある小学校4校が合同で進めている「まちづくりキッズプロジェクト」

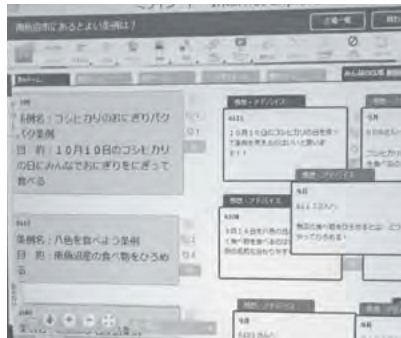


写真2 「ムーブノート」に意見を書くと、ほかの児童のタブレットに付せんのような形でリアルタイムに表示される。それを見ながら、良い点を述べたり、提案をしたりしていった。

の一環として実施した。このプロジェクトは、児童が南魚沼市の条例を考えて議会に提案するという活動だ。授業では、両校の6年生が1人1つずつ、ムーブノートに条例案とその目的や内容を書き込み、それに対してお互いに感想を述べたり、質問をしたりした(写真2)。

「事前に学級内でも同様の活動を行いました。その時には出なかった意見や質問が第一上田小学校の児童からたくさん出てきて、考えを練り上げる材料になりました。また、『こういうところが良い』と他校の児童に認められるのがうれしいようで、自信を深めていました」(石川先生)

例えば、「月1回ゴミ拾い条例」というアイデアに対し、「良い考えだと思います」といった賛辞と共に、「どの日にするかを決めたほうがよいと思います」「ゴミ拾いだけでは拾い切れないゴミも残るのではないのでしょうか」「誰とやるのかを決めるともっと良くなると思います」といったアドバイスが寄せられた。それらの助言を基に、自分の考えを練り直し、最後に合同の発表会を行った。

## 必要感のある場面設定で 情報活用能力を高める

初めての学校間交流授業に大きな手応えを感じたが、一方で課題も明らかになったと、村山校長は語る。

「情報を選び取る力はかなりついてきたと思いますが、情報モラルなどの課題はまだ残っています。また、機器の操作に慣れておらず、入力に時間がかかる子どももいました。基本的な操作スキルがないと、タブレット端末の機能を十分に生かせません。1年生から系統的にスキルを高めていく必要性を感じました」

入力操作に加え、情報を整理したり、自分の考えをまとめたりする能力を高めることも、学習効果を高めるために重要だと考えている。

今後、国際科の授業でも、タブレット端末の活用を検討中だ。例えば、異文化理解を視覚的に助ける素材をタブレット端末で提示したり、画像や音声のソフトを用いて発音を学んだりといった活動を想定している。

「タブレット端末を使う場面設定が重要です。子どもが必要感を持って取り組むことで、より情報活用能力が高まります。そうした学習の積み重ねで、将来的な職業選択の幅を広げ、子どもたちの自己実現につなげたいと考えています」(村山校長)



校長

**村山 稔**

むらやま・みのる

専門は理科。モットーは「学ぶ教師こそが子どもを育てることができる」



教諭

**上野俊也**

うえの・としや

専門は体育。情報教育主任。5学年担任。モットーは「いつも青春、俺についてこい！」



教諭

**石川衣里**

いしかわ・えり

専門は算数。6学年担任。モットーは「子ども一人ひとりとしっかり向き合う教師でありたい」

\*プロフィールは2016年3月時点のものです。